

■100号記念号によせて

新種ツノシマクジラに巡り会うまで

大石 雅之 (学芸第一課長)

「人類の知識の増進と普及のために “for the increase and diffusion of knowledge among men”」。これほど博物館のありようを端的に表現した言葉を私は他に知りません。1800年代半ばにイギリス人の大富豪であり科学者であったジェームズ・スミソンは、そういい残して莫大な全財産をアメリカ合衆国政府に贈与しました。これが16もの博物館や美術館、動物園、研究所をもつ世界最大の研究教育機関、スミソニアン研究機構のはじまりです。

岩手県で発掘した鯨類化石《岩手県立博物館だより (以後「だより」), No.15》をなんとか学術的に意義づけて世に送り出したい。そう考えて研究 (Oishi & Hasegawa, 1995) を進めていた私は、文部省の研修の一環として1997年11月から翌1998年2月にかけて、アメリカ合衆国ワシントンDCにあるスミソニアン研究機構の国立自然史博物館に通って鯨類化石や現生鯨類の調査を行う機会を得ることができました《だより, No. 83》。

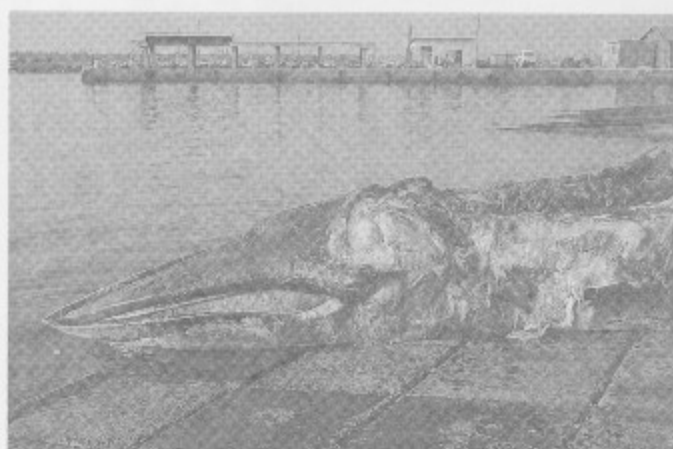
私の研究対象としてきた鯨類化石は今から約500万年前の「古仙台湾」とよばれる入江に生息していました。鯨を知るためには、化石を含む地層の年代や分布などについても調査しなければなりません。調べていくと、「古仙台湾」の西岸にあたる奥羽山脈ができ始めるころのことも解明する必要があり、この点も少し研究を進めることができました (大石ほか, 1996)。

スミソニアンから帰って約7か月後の9月3日、雫石でマグニチュード6.1の地震が発生しました。ある種の直観が働いて翌早朝からひとりで調査を開始し、地質屋としては誰よりも先にその地震断層に巡り会うことができました。地球のエネルギーが生み出した高々30cmほどの段差でしたが《だより, No. 79》、地質屋を一生やっても普通では巡り会うことができないものをはじめて目前にして感激しました。奥羽

山脈の隆起を目の当たりにしたのです。岩手大学などの研究チームとの調査 (越谷ほか, 1998) をひととおり終えたころ、さらにとてつもない出来事になるはずの情報が飛び込んできました。

話を鯨類化石にもどしましょう。私が研究している500万年ほど前の鯨は、約5000万年もの鯨の歴史から数えると、90%ほど現代に近づいた時代に生きていたこととなります。その意味でこの時代の鯨は現生鯨類の起原をさぐる上で重要であり、一方でこの時代の鯨を知るためには現生鯨類の知識が欠かせません。スミソニアンでの調査ではこの点にも留意しました。ことさら、化石には残らない筋肉の状態を知るためには、現生鯨類の解剖学的知識も不可欠です。

世界を震撼させたニューヨークの大惨事からちょうど3年前の9月11日の山口県角島。ここでもささいな衝突事件が起きました。鯨が漁船に衝突して死んだのです。国立科学博物館の山田格さんからその知らせを受けて現地へ飛んだ私は、9月14日に山田さんたちとともに猛暑の中で腐った鯨の腐臭と格闘しました。不十分な調査の後、まだ肉が残っていた鯨の死骸は近くの浜に埋められました。この鯨はナガスクジラ属には間違いはないのですが、せいぜい6種しかいない種の中のどれに属するのかがこの時点で断定できませんでした。遠くから専門家と称する人たちが来たのに、鯨の種類もわからないのではたいしたことがない、と島の人たちには思われたかもしれません。



1998年9月14日のツノシマクジラ

ところが、山田さんたちが東京へ持ち帰った骨盤骨の形態や冷凍肉から得られた分子生物学的な予備調査の結果、角島の鯨が今までに知られているどの鯨とも異なった種類である可能性が出てきたのです。なおかつ、この鯨は1970年代のインド洋-太平洋熱帯海域での特別捕獲調査で得られていた8標本の所属不明のナガスクジラ属鯨類と同種であることもわかってきました。これらの標本については中央水産研究所の和田志郎さんが論文を準備中でしたが、8標本はどれも部分標本で、材料としては十分とはいえませんでした。しかし、はからずも完全な個体が日本に上がったのです。

埋設から半年後の1999年3月、角島の対岸の本土の特牛 (こっとい) の旅館で私は初めて和田さんと面会しました。続く角島での骨格の発掘で、私はナガスクジラ属の他のどの種とも明らかに異なる頭骨を見て驚きました。

以後、論文の論旨を組み立てるのに4年半が経過してしまい、2003年11月20日付の英国の科学雑誌「ネイチャー」にこれをナガスクジラ属の新種 *Balaenoptera omurai* として発表するに至りました (Wada *et al.*, 2003)。和名は「ツノシマクジラ」としました。

ひとりの人間が同じ時期に自然史科学の両極端の分野にかかわったわけですが、地方博物館学芸員の受け持ち分野が幅広すぎるとはいえ、多くの人々のおかげで「知識の増進」に多少でも寄与する機会に恵まれることができました。

文 献

- 越谷・大石ほか19名, 1998. 活断層研究, 17, 9-20.
 Oishi & Hasegawa, 1995. *The Island Arc*, 3, 436-452.
 大石・吉田・金・柳沢・杉山, 1996. 地質学雑誌, 102, 330-345.
 Wada, Oishi & Yamada, 2003. *Nature*, 426, 278-281.